



福智町の いいね! を 見つけよう

Interview



人のあたたかさ地域のつながりの深さが魅力

便利屋 DESTINY 代表
光井 慎吾さん(弁城)



↑ 町内のお宅から依頼され約1時間で完了。

「東」 日本大震災がきっかけで人のために何かしたい」と思い立ち、昨年、23歳で「便利屋 DESTINY」を開業した光井さん。家屋の片付けをはじめ、庭木の伐採、買い物代行、草刈、家具の移動など依頼があったら引き受けています。思い立ったら即行動がモットーという光井さんは、「一度きりの人生、後悔しないような生き方がしたい。生まれ育った町のために何かしたい」と話します。DESTINYは「運命、使命、出会い」という意味で、「人の手助けをすることが自分の使命。一人ひとりとの出会いを大切にしたい」という思いから命名。広告はあえて作っておらず、口コミや人のつながり、信頼関係を大切にしながら仕事をしています。今後の町について光井さんは、「人のあたたかさがこの町の一番の強み。魅力的な場所や面白いイベントがたくさんあるのに、若い人にあまり知られていないのがもったいない。それらを生かしていきたい。そして商工会青年部の一人としても、もっと町を楽しみたい」と話し、今日も町のどこかで人のために活躍しています。



1ターンの、Uターンの者に聞く 福智町の いいね!

「あたりまえ」なものほど、一歩外から見るととてもステキなものだったりします。この町の魅力を外から見つけ、この町で新たな一歩を踏み出した4人に話を聞きました。

「こ」 んなに子育てしやすい環境が整っている町は珍しい」と言う坂本さんは、3年前町にきて児童発達支援センターさらし(赤池)の支援管理責任者に就任し、「人権と福祉の町づくり推進委員会」地域福祉部の部長も努めています。仕事と家庭で子どもと関わる育メンの坂本さんは、外からの目で見ても福智での子育ての魅力がたくさん発見。「コスモス診療所には小児科があり専門医がいる」「ファミリーサポートセンターもあって共助の体制が整っている」「体育館やグラウンド、公園が多く、魅力的な歴史・文化もある」「スイーツ大茶会、バルーンフェスタなど子どもと一緒に楽しめるイベントが多い」など福智町には「住みたくなる」魅力が多いと言います。福智名物が全国に広がっていることや、図書館ができることも楽しみにしているという坂本さんは、「より良い町にするためには外からきた人の視線が大切。積極的に地域に参加したい。町づくり推進委員としても、町の元気のためにはもっと住民参加型であるべきだと思う」と話し、未来を担う子どもたちのために「今」の町づくりに取り組んでいます。



子育て環境が抜群の町。これからの動きも楽しみ

児童発達支援管理責任者
坂本 健一さん(赤池)



子どもたちと楽しく遊ぶ坂本さん。「子どもの笑顔が町を元気にする秘けつ」と言います。

「上」 野焼が全国的にあまり知られていないのは逆にチャンス、型にはまらない表現で自分らしく発信したい」と言う庚申窯の高鶴さん。2年前に帰郷して実家の窯元で作陶を始めました。元々後継者でもなく、帰郷するまではほとんど作陶したことがなかったそうです。絵を描くことが好きで一度はデザイン系の会社への就職を考えながらも、ものづくりによって自己表現をしたいという思いや、会社に勤めるよりも自分の好きなものが作れると強く思い、上野の里へ。親子三代が現役で、個性を出し合いながら競争する環境の中で、「今までと少し違った形で自分の作品をプロモーションし、上野焼の可能性を広げていきたい。若者を引きつけ興味を持ってもらうことで上野焼を伝えたい」と今後のビジョンを描いています。町の好きなところを尋ねると、「自分の家、庚申窯です」とほほえむ高鶴さん。豊かな自然、品格のある上野焼、作品づくり、今のライフスタイル。身の回りには魅力がたくさん発見しながら、町の伝統を守り伝えています。

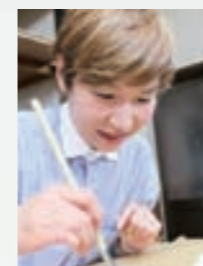


自分らしく上野焼の可能性を広げたい

庚申窯 3代目
高鶴 裕太さん(上野)



↑春の陶器まつりでは「絵付け体験」などを行い、上野焼の魅力を発信しています。



若者たちがアートでつながる町にしたい

落雁お供物 楽心堂
大井 知子さん(金田)



デザイン性の高い落雁はすべて手作業。全国からの注文が相次いでいます。

「デ」 ザインやアートで想いを表現することで活躍したい」という夢を叶えるために帰郷した大井さん。長く住んだ東京から昨年戻り、実家の「楽心堂」でものづくりをしています。「楽心堂」は和菓子の落雁を使ったお供えものの製作工房で、職人が一つ一つ手仕事で作製しています。元々ものづくりが好きだったという大井さんは、「田舎」・「伝統工芸」という二つの材料で、「福智町だからこそ」自分の夢を叶えることができると気づいたそう。一度町を離れたことで、四季折々の表情が見れるあたりまえの風景や、東京にはない近所の人とのつながりの深さが新鮮に思え、この町に生まれてよかったと言います。「福智をアートが身近にある町にしたい。町を歩くだけでトキメキがあり、若者が夢や希望を語れる町が理想。そのために今ある素材を生かして、この場所で自分らしく頑張りたい」と今後の思いを語る大井さん。家族や仲間と工房を守り継ぎながら、美しい文化を発信しています。

